

第 章 結 語

第7次調査と第8次調査は、古墳時代初頭と古代末～中世前半の集落を中心とした発掘調査であった。各時代の成果をまとめて結語としたい。

古墳時代初頭

鹿田遺跡では、弥生時代の集落として第1次・第5次・第2次調査地点があげられる。古墳時代にはいると遺跡全体へと広がるが、集落の様相が具体的に判明しているのは第7次地点周辺だけである。

第7次調査地点では、集落構造を比較的単純化したかたちで抽出することができた。地形復元から導き出された幅の狭い微高地上に、一時期に、竪穴住居1～2棟・掘立柱建物1棟・井戸1基・土坑数基・土器溜まりで構成される集落が営まれ、溝による区画も想定される。その配置は、微高地端部に井戸、そして、住居と掘立柱建物が近接して居住域を形成し、その南側に作業域として土坑と土器溜まりが配され、加熱作業が行われるという集落構造が復元される。このように、中心的集落の周辺域に新たに展開する集落の状況が明らかとなった点、最小単位の集落構造が確認された点は、今後、同時期の遺跡を考える上で、良好な資料と評価されよう。

古代末～中世前半

集落 第7次調査地点では、区画溝に囲まれた屋敷地内に、井戸と大形の掘立柱建物を含む構造物そして作業空間的な場が配されるという中世前半における屋敷地の具体的な姿を示すことができた。屋敷地を巡る溝は堀ともいえそうな規模を有し、平面形もやや特異な形態を示す点で一般的とは言い難い。屋敷地の性格を考える上でも、その機能については今後検討しなければならない。

区画溝は第8次調査地点でも確認される。調査区内は東西方向の溝で埋め尽くされる状況から、屋敷地の境界線にあたりと評価され、集落の区画を考える上で重要な地点となった。こうした区画溝の推移を考察するなかで、古代末と中世前半の集落間には、前段階の区画溝の廃棄と再構築そして屋敷地の再編を経て、質的な変化が生まれる可能性を求めた。古代末の鹿田遺跡では、すでに1町単位を基準とした区画がなされ、複数の屋敷地が配される状況を描き出すことができる。集村化がどうかは今後検討する必要があるが、こうした状況が周辺遺跡に先駆けて成立している点は、「鹿田庄」との関連を考える上で注目される。

一方、中世前半に新たに形成される屋敷地では、それまでの均質的で開放的な区画から、堀を彷彿させる大形溝に囲まれた閉鎖性の高い空間へと向かう。こうした変化は、14世紀に進行する溝に囲まれた屋敷地の形成と集村化という社会的な動向に一致したものであるが、その中でも、その規模の大きさは鹿田遺跡の性格を考える上で重要であろう。

遺物 遺物で注目されるのは、第8次調査地点の2条の溝から出土した土器群である。両溝からは、吉備系土師質土器椀と和泉型瓦器椀・東播系須恵器椀そして備前産と考えられる椀がそれぞれ出土し、それらに1条の溝には東播系の片口鉢が加わる。いずれもほぼ完形であり、古代末における各土器の併行関係を示す良好な資料といえる。

その他に、特筆される遺物は猿形木製品である。中世における芸能史研究からも注目される希少価値の高い資料である。その使用形態の検討から、本地を訪れたであろう当時の職能民の存在が浮かび上がる。「鹿田庄」の賑わいを彷彿させると同時に、第7次調査地点に復元される屋敷地の性格を考える一助になる点でも重要である。

現在、鹿田遺跡では第17次調査までの発掘を終了し、新資料が蓄積されている。こうした資料を加え、本報告で検討した試論あるいは考察におよばなかった問題を含め、さらに検証・深化させていきたい。